

謝肇淛『文海披沙』の一条について

材木谷 敦

序

謝肇淛（一五六七—一六二四）『文海披沙』巻五「体物之妙」条に言う。

古人のテキストは、ごく簡単に書き流したような部分でも、描写がこの上なく素晴らしい。例えば、曹植「雀賦」⁽¹⁾には「頭は顆蒜のごとく、目は擘椒のごとし」とある。楊慎が引く白居易「荔枝序」⁽²⁾に「核は琴軫のごとし」とあるのも、描写がとてもの確である。しかし、これを白居易の作品集で確認してみると、本来は「琴軫」ではなく、「枇杷」に作る。楊慎が意図的に改めたのにほかならないだろう⁽³⁾。しかし、「枇杷」という言葉よりも「琴軫」のほうがよい⁽⁴⁾。

古人の表現の素晴らしさを語ろうとして、曹植のテキストを例に挙げた後、結果として、白居易のテキストそのも

のではなく、楊慎（一四八八—一五五九）が引いて見せた状態を評価することになってゐる。表現の素晴らしさを賞賛されるべき古人は、曹植のほかには、楊慎ではなく、白居易であつたはずではないか。楊慎は、ごく簡単でありながら描写が素晴らしいテクストを書いた古い時代の人物ではなく、他者のテクストをある意図を以て——よく考えた上で——改変した比較的近い時代の人物だからである。白居易が賞賛の対象ではなくなつたことにより、議論が古人の表現の素晴らしさという当初の問題から離れているように見える。

謝肇淛は、曹植のテクストを何かで読み、その表現が印象に残つたのだろう。白居易のテクストについては、楊慎の著作で読み、その表現がやはり印象に残つたのだろう。ふたつのテクストを材料に、古人の表現の素晴らしさについて語ろうとしたのだろう。ある程度まで考えるか実際に書き始めるかした時点で、白居易のテクストを原典で確認した結果、楊慎による引用との異同に気付いてしまつたのだろう。古人の表現の素晴らしさについて単純に賞賛するような方向では済まず、予定された議論とは方向がずれてしまうことは、明らかだつたはずである。それでも、この一条は、楊慎の意図的な改作を賞賛する方向へと不自然な形で変化しながら書かれることになつたのだろう。

謝肇淛はその著作においてしばしば楊慎の言説に訂正を加えたり疑義を示したりしているのに、ここではそういう方向は選ばれなかつたようである。また、そもそもこの一条を書くのをやめることも選ばれなかつたようである。

白居易のテクストの原典など確認しなければよかつた。この一条を書くこととする時、謝肇淛はそう思つたのだろうか。本稿は、先的一条から得られたこの散漫な問いをめぐつて、検討を試みる。

謝肇淛は詩作や詩論で知られるほか、著作としては『五雜俎』が特に知られている。『文海披沙』は、さまざまに分野の知見や考察を書き留めた書物であり、『五雜俎』に似る。しかし、感想のような内容が比較的多く見られる点で、異なる傾向があるとも言える。謝肇淛の言説のありかたを理解する上では『文海披沙』について検討することに一定の意味があると考えた上で、とりあえず比較的瑣末な検討を試みるものである。

中国語原文は拙訳により、原文を註に示す（句読は特に断らない限り引用者による）。訳文中の「 」は補足などを示す。

と変更を加えられなかった部分がある中で、先の引用は変更を加えられなかった部分であるということになる⁽⁹⁾。さしあたり、先の引用についてテキストの信頼性を疑う理由は、存在しないと考えてよいだろう。「枇杷」という言葉よりも「琴軫」のほうがよい。謝肇淛はそうとしか書かなかつたし、誤刻でもない。本稿はそう考えることにする。

二 原典確認の意味

謝肇淛が白居易のテキストについて原典を確認しなければ、議論は——少なくとも表面上は——自然に進んだはずである。謝肇淛が原典を確認したことの意味について検討する必要があるだろう。

そもそも、謝肇淛が白居易のテキストについて原典を確認する必要を感じたことには、それなりの理由があつたと思われる。ごく単純に言うと、謝肇淛が楊慎による引用を当てにならないと考えていたためであると思像される。楊慎は博識で知られていたものの、その著作に問題が多いことは、陳耀文（一五二四—一六〇五）『正楊』（一五六七年）、胡応麟（一五五二—一六〇二）『丹鉛新録』『芸林学山』（ともに一五九〇年）のような楊慎の著作を訂正する書物が行われたことなどからしても、当時の一定の共通認識だったと考えられ、謝肇淛もその認識を共有していたと考えられるからである。陳耀文、胡応麟、謝肇淛の順で、それぞれの言説を確認してみたい。

陳耀文「『正楊』序」は、楊慎の著作について次のように言う。

わたしは楊慎の著作を読み、立論というものの難しさを心の底から嘆く。そもそも、世間で楊慎を賞賛するひとは、公平さが徹底しているとか、諸家の議論を総合しているとか言うばかりであるし、楊慎は空前絶後を自任している。今ここ「『正楊』を指す」で見るのはわずかに数種類（の著作）に過ぎないのに、間違いや自己矛盾はこの「『正楊』に見られる」通りである。適当に自分なりに正しいと思ひ込んでいながら博学ぶっていただけ

なのか、それとも材料を持っていても記録し伝える者の中に忠臣がいなかったのか⁽¹⁰⁾。

楊慎そのひとのみならず楊慎を評価する層をも批判しつつ、楊慎の著作の問題点について酷評している。四庫提要にも言うように、陳耀文は楊慎に対して攻撃的だった。

陳耀文はその「楊慎の著作の」間違いを検討して正し、誤解が広がり他に及ぶことを防いだので、学ぶ者にとって功なしとしない。しかし、名を争おうとしたことから欠点が生じており、言葉はたいい攻撃的、悪口や嘲笑だらけである。古人は不満を抱いて論争しても——例えば、北宋・吳縝が『新唐書糾謬』において『新唐書』を正したような場合でも——これほどではなかった。著作というもののあるべき形から、特に外れている⁽¹¹⁾。

「『正楊』序」を踏まえて書かれていると思しい胡応麟「『丹鉛新録』引」は次のように言う。

わたしが楊慎の問題点を見たところ、だいたいふたつのことが挙げられる。ひとつはテーマが高度過ぎることであり、ひとつは持論が大胆過ぎることである。テーマが高度過ぎるので、常識外れになり、先人の説について、浅薄なものを穿鑿して深遠と見なしてしまい、明瞭なものをかき乱して不明瞭にしてしまう。持論が大胆過ぎるので疎漏になり、先人の説について、おかしなものをいきなり信じ込んでしまい、もつともなものをいきなり間違いとしてしまう。旧説の剽窃や、古書に対する矛盾に至っては、人々がだいたいそのことで楊慎を非難しているのは、それもまた間違いだである。楊慎は早い時期に謫せられて西南地域の守備の任に就き、書物を携えることも難しかったので、記憶から引き出すしかなかった。千慮に一失が生じるのも、状況からすればもつともなことである。わたしが楊慎の遺文を読むと、まさに先賢であり、一言でポイントを突いている。みな評価し、関

心を払うのが適切である。陳耀文は、楊慎の言葉に乱雑で理解しにくい点が多いのは、記載して広めようとした際に忠臣がいなかったせいだろうという意味のことを述べている。わたしは楊慎を心から慕い、その一助となりたいので、読書の合間に少し間違いを正してみた。浅学非才ながら、いつか楊慎のもとで忠臣のひとりに数えられたいものだ⁽¹⁰⁾。

楊慎の著作の問題点を指摘しつつも、楊慎の抱えた特殊事情から理解を示し、一定の評価をしており、『正楊序』に比べれば、好意的であると見受けられる。『正楊序』においては楊慎を評価する層まで批判対象となっていたところ、ここでは楊慎を批判する層を意識しているようである。陳耀文の言説とされている部分は、『正楊序』の内容を曲げていると考えられる。「忠臣」の不在は、『正楊序』においては非難に伴う想像の一部に過ぎなかったところ、『丹鉛新録』引においては斟酌すべき事情にすりかえられている。それに伴い、「忠臣」は、『正楊序』においては「誠実な人物」程度の意味にも「錯誤について忠告してくれる人物」の意味にも理解され得るところ、『丹鉛新録』引においては明らかに後者の意味になっている。『丹鉛新録』引だけを見ると陳耀文も楊慎に對して好意的であったかのように見えるほどである。

謝肇淛は、その著作でしばしば楊慎に言及する。特に『文海披沙』においては、単なる引用や錯誤などの細かい指摘以外に、楊慎の問題点に関する認識をある程度まとまった形で述べる言説が見られる。その言説には、『正楊序』や『丹鉛新録』引との関係が想定される。

『文海披沙』卷五「楊用修」第一条に言う。

本朝における博識は楊慎が最高である。その議論、考証、攻撃、非難には、全力が注がれている。しかし、その著作は間違いの程度がその言葉よりも激しい。だから、後のひとも好んでその間違いを正して批判している。わたしは、古人の著作というものは、意見の違いとか記憶の間違いとか見聞の偏りとかの問題を免れないと思

う。後の読者は適宜修正を加えれば、忠臣たるを失わない。過度な要求や罵倒は、妄言を蔓延させるばかりである。昔なら、誤りの訂正にはまだ寛容があった。楊慎に至ると、口に任せて罵倒を加えることが極度になった。自分では他人を攻撃するのを好んでいながら他人には自分を攻撃して欲しくないなど、無理があるだろう。王世貞は楊慎を参考にしたので、その持論には穏当なものがある⁽¹³⁾。

ここに言う「忠臣」は、直接には「丹鉛新録」引を、間接的には「正楊」序を、踏まえた表現であると考えられる。その意味では、謝肇淛の議論は、「正楊」序や「丹鉛新録」引における議論の流れの延長にあると考えられる。楊慎を批判する層を意識している点で、立場としては、「正楊」序よりも「丹鉛新録」引に近いものがある。

謝肇淛は、楊慎の著作に見られる錯誤などの問題点について、人間の一般的な限界から理解を示した上で、議論の焦点を批判というもののありかたに移し、穏当さを希求しようである。「過度な要求や罵倒」は、おそらく陳耀文を念頭に置いていたのだろう。人間の一般的な限界から考えて理解を示しているということは、楊慎固有の事情を考えて理解を示した「丹鉛新録」引と比較すれば、より根本的なレベルで「しかたがなかった」と考えていることになり、「丹鉛新録」引の場合よりも楊慎に対して好意的であると見受けられる。総じて、謝肇淛には、楊慎の著作に見られる錯誤などの問題点に対する認識があったこと、一方で謝肇淛がそれら問題点を抱えた楊慎に対して好意的であったことが認められる。

また、「楊用修」第一条に言う。

楊慎は優れた才能があつた上に、宰相の子であつたことにより中書省や秘書省で読書をしたので、宮中にあつた珍しくて世間には出回っていないような本をしはしば密かに手にした。その雄弁と博識には当然に理由があるということだ。遠く辺地に流され失意の時期を過ごすようになると、自分の記憶だけに基づいて引用傍証をする

ことがあった。質せば「昔のこれこれの本に出ている」と言った。（博識で儀礼の權威であった）北宋・陳彭年
が馬車で誤ったルートを通行した際、「典故がある」と言ったので、諸官が陳彭年の博識にはかなわないと考え
て陳彭年を正すことなどできなかったのと同じようなものである。古人の『山海經』『淮南子』『洞冥記』『述異
記』などの書物が虚実相半ばすることに至っては、思えば当然ということなのだ⁽¹⁴⁾。

これは、『丹鉛新録』引の「忠臣」の問題から理解されるべき言説であると考えられる。楊慎のありかたについ
て、ある種の典故を持ち出すことで、「あり得べきこと」と位置付けようとしている。周囲から錯誤を指摘できるよ
うな存在だったかどうか。結果として、楊慎に起こったことは、その実力ゆえに避けられなかった不幸のような何か
であるということになる。ここからも、楊慎の著作に見られる錯誤などの問題点に対する認識が謝肇淛にあったこ
と、一方ではそれら問題点を抱えた楊慎に対して謝肇淛が好意的であったことが認められる。

三 もうひとつの引用

好意の問題はひとまず措くとして、錯誤などの問題点に対する認識について、もう少し検討する必要があるかも知
れない。

「体物之妙」条を書こうとした時、謝肇淛には、楊慎の著作に見られる錯誤などの問題点に対する認識があり、し
たがって白居易のテキストについて楊慎の引用を当てにせず原典を確認したと考えるでしょう。しかし、その時の謝
肇淛が誰による引用であっても原典を確認する手続を踏んだとするならば、ここで殊更に楊慎による引用に対する謝
肇淛の扱いを問題にする意味や、また謝肇淛の楊慎観のようなものを云々する意味も、ほとんどなくなってしまう。
そこで、曹植のテキストの引用について考えてみたい。

謝肇淛は曹植のテキストを何に基づいて引用したのか。曹植のテキストの題は、今見える限り一般には「雀賦」で

はなく「鶴雀賦」である。そもそも、曹植のテキストの内容は「鶴」と「雀」の対話であり、「雀賦」では題名として適切さを欠くので、曹植の作品を収めることを目的とした書物が、題を「雀賦」に作るとは考えにくく、したがって謝肇淛が何か原典のようなものを確認した上で引用しているとは考えにくい⁽¹⁵⁾。また、今見える「鶴雀賦」は、「顆蒜」ではなく、「蒜顆」或いは「果蒜」に作る⁽¹⁶⁾。この点からも謝肇淛が何か原典のようなものを確認した上で引用しているとは考えにくい⁽¹⁷⁾。

だからと言って、楊慎の著作からの孫引きであるとも考えにくい。楊慎の著作から孫引きしようとすれば、白居易の場合と同様に原典を確認するプロセスが生じたはずであり、謝肇淛は題の問題や文字の異同に気付いたはずである。管見の限り楊慎の著作には曹植のあのテキストは現れないものの、そのことはむしろどうでもよいかもしれない。

謝肇淛が引く二句は、今見える「鶴雀賦」にあつては連続しては現れず、長い賦の中で飛び飛びに現れる。そのことと題の問題や文字の異同の問題を考え合わせれば、謝肇淛は、過去に読んだ何かのテキストの記憶に基づき⁽¹⁸⁾、飛び飛びに現れていた二句を議論の必要に応じてまとめて引用して見せ、その際にたまたま記憶のままに題を誤り、たまたま記憶のままに「顆蒜」とした、ただそれだけのことであり、何に基づいて引用したのかなど考えるべくもないように見えるかもしれない。しかし、同じ二句を「雀賦」のものとして引き、「蒜顆」や「果蒜」ではなく「顆蒜」に作る書物が存在するので、その見立ては選びにくい。

宋・陸佃『埤雅』卷九「釈鳥」「雀」条に言う。

「雀賦」に「頭は顆蒜のごとく、目は擘椒のごとし」とある⁽¹⁹⁾。

曹植の名に言及がない点は問題ではあるものの（或いは、本によつては曹植の名を示したのだろうか）、件の二句が題も文言も一致して現れる。「体物之妙」条を書こうとした時、謝肇淛が『埤雅』に基づいて件の二句を引いて曹

植の名を記憶に基づいて補ったとか、謝肇淛が陸佃の見たものと同じような系統の曹植の別集の類に基づいてたまたま陸佃と同じ二句を選んで（当然に）曹植の名を記したとか（その場合、その本は題を「雀賦」と作っていることになる）、もともと件の二句を抜き出して示した何かの本があつて（その場合も、その本は題を「雀賦」と作っていることになる。曹植の名は記していてもいなくてもよい）陸佃も謝肇淛もたまたまそのような本を参照したとか、『埤雅』を引く何かの本⁽²⁰⁾から謝肇淛が『埤雅』を孫引きしたとか、何通りかの想像が成り立つだろう（いずれの場合も、謝肇淛は賦の正確な題を思い出せなかつたことになる）。

ただ、謝肇淛が『五雜俎』（一六一六年序刊）で何度か『埤雅』に言及していることに着目したい⁽²¹⁾。謝肇淛が『文海披沙』執筆時から『埤雅』を知っていたと考えることに無理はないだろう。そこからすれば、ほかの想像を完全には排除できないとしても、謝肇淛が『埤雅』に基づいて件の二句を引いて曹植の名を記憶に基づいて補ったという想像が、最も自然であるように思われる。

謝肇淛による曹植の引用が原典によらず『埤雅』によつたものであるとするならば、「体物之妙」条を書こうとした時の謝肇淛は、誰による引用であつても原典を確認する手続を踏んだというわけではないことになるだろう。したがつて、楊慎による引用に対する扱いを問題にする意味も、また謝肇淛の楊慎観のようなものを云々する意味も、一応は存在することになるだろう。本稿の問題に即して言えば、「体物之妙」条を書こうとした時の謝肇淛が白居易のテキストについて原典を確認しようとしたのは、ほかでもなく楊慎による引用だつたからであるということになる。

四 奇ということ

「体物之妙」条を書こうとした時の謝肇淛にとつて、楊慎の引用に係る白居易のテキストについては原典を確認することが当然のことであつたとすれば、普段ならばそんなことはほしめないのによりよつてたまたまわざわざ原典を確認してしまつたというような場合と異なり、原典を確認したという行動それ自体からは、原典を確認しなければよか

つたと謝肇淛が思ったかどうかはわからない。

原典を確認した結果、楊慎による引用との異同が明らかになったとして、そこで謝肇淛が楊慎の錯誤を指摘する内容を書いたとかあの一冊を書くのをやめるとかしたのであれば、謝肇淛は原典を確認しなければよかつたとは思わず、むしろ原典を確認してよかつたと思つたと、想像してよいかもしれない。しかし、謝肇淛が意図的な改作を結果として賞賛する内容の一冊を書いている以上、想像の条件は全く異なる。

既に見たように、謝肇淛は楊慎の著作の問題点を認識した上で楊慎に対して好意的であつた節がある。そのことは、楊慎の結果として賞賛するあの一冊を書いたことに、無関係ではないかもしれない。しかし、先に見た好意は、無条件な非難や過度の非難を望まないといった意味での好意であり、そのような消極的な好意から期待されるのは、何かの問題点に気付いても、過度に非難しないとか、あり得べき錯誤の類と見てあまり問題視しないとかの選択であろう。原典と引用との異同を単なる錯誤ではなく意図的な改変と見なし、さらにはその改変を賞賛した、その積極的な好意までを説明するには、不足が感じられる。

『文海披沙』巻五「禹穴」条に言う。

楊慎は禹穴について検討し、巴蜀にあると考えた。その言葉はとても断定的である。しかし、わたしにはその通りであるとは考えられない。天下の山や川には名前が同じものはたくさんある。自分がある時たまたま見かけたものを根拠にして古くからの議論を無視することはできない。(略)概して、楊慎の議論は、奇を好んで軽々しく信じ込み、強弁して道理を顧みない(22)。

奇を好んだことも、軽々しく信じ込んだことも、強弁したことも、道理を顧みないことも、何が原因であり何が結果であるかといったこととは無関係に、等しくよきことならざる事柄として指摘しているだけなのかもしれない。しかし、ここでは「奇を好んで」という部分に着目したい。謝肇淛は、少なくとも「楊慎は自分の議論で奇を好んでい

たはずだ」と思う程度には、楊慎の議論に奇の可能性を感じていたのだろう。見方を変えると、謝肇淛には、楊慎の言説に奇か否かという観点から接する傾向があったということである。

謝肇淛は、楊慎に奇を好む面があったと思っていて、楊慎の言説に奇か否かという観点から接する傾向があったとする。楊慎の言説について、「確かに奇だ」と思うことがあったかもしれない。「この程度のことを奇だと思っていたのか」と思うことがあったかもしれない²⁰。いずれの場合でも、或いは肯定的に、或いは否定的に、楊慎が何を考えたかを問題にすることになりやすかっただろう。

奇と妙とに、趣味的な価値項目であることにおいて、類縁関係があるとしよう。「体物之妙」条を書こうとした時、白居易の原典よりも楊慎によって改変された状態のほうが趣味的に優れている——「妙」である——と見えた。そこから楊慎の意図を肯定したのだろう（優れていないと見えた場合には、錯誤に訂正を加えたり憶改に疑義を示したりする中で楊慎の意図を否定的に問題にするようなこともあり得ただろう）。不自然に見える一条が書かれたことは、謝肇淛が議論の方向に無頓着だったことなどが原因ではなく、議論の方向の妥当性よりも趣味性を重視した結果であるように見える。言わば、面白さが正確さに優先されたということである。それ故に、訂正を加えたり疑義を示したりすることも、そもそも書くのをやめることも、選ばれなかったのではないか。

結 語

あ的一条を書こうとした時、おそらく、白居易のテキストの原典など確認しなかったとは、謝肇淛は思わなかっただろう。これが、当初の散漫な問いへのとりあえずの答えになりそうである。もちろん、単なる想像の域を出ない。想像ついでに言うとして、原典を確認したことにより相対的に楊慎の「奇」に気付かされたと思っただらば、謝肇淛は原典を確認してよかったとも思っただかもしれない。

想像なので、事実としてどうだったのかは、よくわからない。それよりももう少しわかったことにしてよさそう

のは、言説として定着されるべき考証のありかたが選好によって左右されることもあり得たということだろうか。

註

- (1) 今本では「鵲雀賦」が一般的である。この題の問題については後に改めて触れる。
- (2) 楊慎「芸林伐山」卷六「荔枝」条および楊慎「太史升菴文集」卷七十九「花木一」「荔枝」条には、「白居易の『荔枝図』に言う」(原文／白樂天荔枝圖曰)とある(国立公文書館・内閣文庫蔵刊本『太史升菴文集』卷七十九、4b)。白居易の作品の題は、今本では「荔枝図序」が一般的である。なお、楊慎は作品のほぼ全部を引いた上で、「この文は、声に出して味わえし、絵になる」(原文／可歌。可詠。可圖。可畫)と絶賛する。
- (3) 朱金城箋校『白居易集箋校』(上海古籍出版社、一九八八年)には、「枇杷」について諸本の異同を問題にする校語は見られない(二八一—九頁)。
- (4) 四庫全書存目叢書編纂委員会編『四庫全書存目叢書』、莊嚴文化事業有限公司、一九九七年、子部第一〇八冊、二〇七頁。原文／古人文字雖極草草處。亦曲盡體物之妙。如曹子建雀賦云。頭如顆蒜。目如擘椒。真可爲雀傳神矣。楊用修載白樂天荔枝序云。核如琴軫。體狀亦甚精當。而考之白集。原作枇杷。當是用修以意改之耳。然枇杷語不如琴軫。
- (5) 註(4)前掲『四庫全書存目叢書』、『北京図書館古籍珍本叢刊』(北京図書館古籍出版編輯組編、書目文獻出版社、一九八八年)第六五卷、『統修四庫全書』(顧廷龍主編、上海古籍出版社、一九九五年)第一二三〇巻に収める『文海披沙』は、いずれもこの本を底本とする。
- (6) 『福建師範大学学报』(哲学社会科学版)二〇〇六年第六期、福建師範大学、二〇〇六年、九五—九六頁。
- (7) 二本とも万曆三十九年の序を持つので、『内閣文庫漢籍分類目録』などで二本とも万曆三十七年序刊とされているのは、正確さを欠く。
- (8) 「ほぼ」と言うのは、劉氏が南開大学蔵本卷八のある一条の条目をはっきり読み取れないと言っていることによる(註(6)前掲誌、九六頁、註③)。つまり、一致しない部分があるのではなく、異同が確認できない部分があるということである。
- (9) 本稿としては、二系統の明刊本において問題の部分について文言の異同がないことが確認されれば足りるので、とりあえず、存在が確認される各種刊本の先後関係を厳密に特定するには及ばない。
- (10) 『四庫全書』上海古籍出版社、一九八七年、第八五六巻、四八頁。原文／余觀升庵氏書而深嘆立言之難也。夫世之稱升庵者。

不曰正平一覽。則云管總百氏。即其自視也。固已前無古人。後無來者。今茲所見才數種耳。迺譌謄自相違悞若此。豈率爾師心在大方之家爾邪。抑復菁並著傳載者無盡巨耶。

(11) 同前書、四七頁。原文／耀文考正其非。不使轉滋疑誤。於學者不爲無功。然覺起爭名。語多攻訐。醜詞惡諛。無所不加。雖古人挾怨構爭。如吳縝之糾新唐書者。亦不至是。殊乖著作之體。

(12) 原文／胡心麟『少室山房筆叢』中華書局、一九五八年、七一頁。原文（句讀は同書による）／余嘗竊窺楊子之癖。大概有二。一曰命意太高。一曰持論太果。太高則迂怪之情合。故有於前人之說。淺也鑿而深之。明也汨而晦之。太果則滅裂之覺開。故有於前人之說。疑也驟而信之。是也驟而非之。至剽激陳言。盾矛故軼。世人率以訾楊子。則又非也。楊子早歲成瀆。罕攜載籍。袖諸腹笥。千慮而一。勢則井然。以余讀楊子遺文。即前修往哲。隻字中窺。咸極表章而屑屑是也。晦伯曰。楊子之言。間多蕪翳。當由傳錄偶乏盡臣。鄙人於楊子。業忻慕爲執鞭。輒於佔俾之暇。稍爲是正。甕天蠹海。亡當大方。異日者求忠臣於楊子之門。或爲余屈其一指也夫。

(13) 註(4)前掲書、二〇六頁。原文／國朝博物洽聞。無如楊用修。其議論考訂。摭擊詆訶。不遺餘力。而其所著書。紕漏誤舛。甚於其言。故後之人。亦好糾其訛而攻之。余謂古人著作。或意見之不同。或記憶之稍誤。或耳目之暫遺。豈能無病。後之觀者。隨事糾正。不失忠臣。苛求醜詆。徒滋口業。前代訂訛。尚存厚道。至用修而肆罵極矣。己好攻人而欲人之不攻己也。得乎。王元美鑒於用修。故其持論稍平。

万曆三十七年序刊本と内閣文庫所藏万曆三十九年序刊本との間で文字の異同はない。

(14) 出所同前。原文／用修既有雋才。復以宰相子讀書中秘。内府珍奇人間所無之書。往往竊出。其雄辯該博固有自來。比流落遐方。卉服爲伍。間有引援自出己意。問之則曰出古某書。亦猶陳彭年導駕誤行。曰自有典故。有司畏其該恰不敢糾也。至如古人山海淮南洞冥述異等書。虛實相半。想當然耳。

なお、内閣文庫所藏万曆三十九年序刊本では、「竊出」を「獨擅」に作り、「誤行」の後に「黃道」があり、「至如」を「乃知」に作る。このほうが意味はわかりやすい。

(15) 題については、「雀鶴賦」に作った場合もあり得ると考えられる。例えば、四部叢刊本『曹子建集』は、目録で「雀鶴賦」に作り、本文で「鶴雀賦」に作る。また、謝肇淛が引いたものに似る二句（文言は「頭如果蒜。目似壁椒」であり、やや異なる）を引く顔之推『顏氏家訓』巻六「書証」篇は、題を「鶴雀賦」に作る（王利器『顏氏家訓集解（増補本）』、中華書局、二〇〇二年、四七〇頁）。この引用について、宋・沈揆は「『顏氏家訓』の」諸本はみな「雀鶴賦」に作る」と言い（内閣文庫

蔵、知不足齋叢書本『顔氏家訓攷証』、7a。原文／諸本皆作雀鶴賦、実際に『太平御覽』卷九七七所引『顔氏家訓』のように「雀鶴賦」に作る例が確認できる。『顔氏家訓』だけの問題ではなく、そもそも題を「雀鶴賦」に作るような曹植の別集の類が存在した可能性も考えられる。『顔氏家訓』に独自の内容を加える形式で編まれた書物である宋・董正功『統家訓』は、題を「雀雛賦」に作り（註(5)前掲『北京図書館古籍珍本叢刊』、第六八巻、六九七頁、「雀賦」という状態に酷似する。しかし、王氏も誤りであると指摘するように（前出『顔氏家訓集解（増補本）』、四七一頁）、これは曹植の賦全体を考えず引用部分だけを考えてことによる誤りであると思われる。

(16) 趙幼文『曹植集校注』人民文学出版社、一九八八年、三〇三—三〇四頁による。

(17) 註(15)で触れた文言の違いからすれば、『顔氏家訓』から引いているとも考えにくい。

(18) 謝肇淛が比較的早い時期に曹植の「鶴雀賦」そのものを読んでいたことは、確かである。謝肇淛自身に「鶴雀賦」という作品があり、『小草齋集』巻一などに収める、その序に「わたしは呉興から博州に転任し、時間の余裕がある折に曹植の『鶴雀賦』を読んだ。内容に感銘を受け、戯れに模倣してみる」（註(4)前掲『四庫全書存目叢書』集部第一七五冊、六八頁。原文／余自吳興徙治博州。暇中讀子建鶴雀賦。悲其意而戲效之」と言う。謝肇淛の官歴から考えると、読んだ時期は万曆二六（一五九八）年頃と推定される。

(19) 註(5)前掲『北京図書館古籍珍本叢刊』、第五巻、三二〇頁。原文／雀賦云。頭如顆蒜。目如擘椒。

(20) 「埤雅」は、その性質上、引用の対象されることが少なかつたと考えられる。例えば、明・劉文泰等『本草品彙精要』（弘治十八（一五〇五）年序）は、件の二句を含めて『埤雅』を引用し（二句に文字の異同はない）、賦の題を引用していない（註(5)前掲『統修四庫全書』、第九九一巻、二二二頁。明・李時珍『本草綱目』（万曆十八（一五九〇）年）巻四八「禽部」二「雀」にも、件の二句が現れる（二句に文字の異同はない。これも『埤雅』からの引用である可能性はあるもの）、『埤雅』の名には言及せず、また賦の題を示していない（国立国会図書館蔵明刊本、巻四十八、24a）。

(21) 管見の限り、『五雜俎』巻九「物部」一（註(5)前掲『統修四庫全書』、同巻、五四四頁、五二六頁）、巻十「物部」二（同、五四三頁、五四四頁）、巻十一「物部」三（同、五六六頁）、巻十二「物部」四（同、五七七頁）において、『埤雅』への言及がある。

(22) 註(4)前掲書、二二二頁。原文／楊用修辯禹穴。以爲在巴蜀。其言甚堅。而余未敢以爲然也。宇内山川同名者多矣。其可以已一時之偶見而盡排千古之議論乎。（略）大率用修之議論。好奇而輕信。強辯而不顧理。

万曆三七序刊本と内閣文庫所蔵万曆三九年序刊本との間で文字の異同はない。

(23) ちなみに、『五雜俎』の場合ではあるが、「わたしは子供の頃に歴史書を読んで知っていたのに、楊慎は新しいことだと思っただろうか」(註(5)前掲『続修四庫全書』、同巻、四〇三頁。原文／余髫時讀史即知有此。用修乃以爲新聞耶)といった表現が思い出される。